

# 特権階級の子供時代—あるインド文官職の娘の回想録

A Privileged Childhood—Memoirs of a Indian Civil Servant's Daughter

マラヴィカ・カールレーカル

Malavika Karlekar

長妻由里子訳

マラビカ・カールレーカル博士は1999年7月から11月までお茶の水女子大学ジェンダー研究センターに外国人客員教授として赴任し、共同研究「アジアにおける女性と開発」、公開講演会、月例研究会、夜間セミナーを行った。

カールレーカル博士は、デリー大学とオックスフォード大学で政治学の学士号を、デリー大学で社会学の博士号を取得している。シュリラム産業・人間関係研究センター、インド社会科学研究会議、デリー大学経済研究所社会学科で研究員を、ジャミア・ミリア・イスラミア大学教育学部教授を勤め、女性と開発研究所の助教授を経て、1994年同研究所教授となり現在に至っている。この間カナダ、日本、フィリピンにおいて、インドとの国際共同研究プロジェクトも担当し、国際的に共同研究者として評価されている。

カールレーカル博士は、1970年代後半に最低カーストの女性労働者のフィールドワークによってインドの女性学の知見に新しい境地を開き、その後、インドの少数民族・女性に対する暴力、男女平等教育プログラムの開発、「開発と女性」の研究分野におけるオーラル・ヒストリーなどの諸分野で重要な貢献を重ねている。また1994年以来、『インド・ジェンダー研究』誌の編集長を勤め、インドのジェンダー研究の牽引力となっている。

著書には *Poverty and Women's Work—A Study of Sweeper Women in Delhi* (1982), *Voices from Within—Early Persona: Narratives of Bengali Women* (1991) などがある。

## はじめに

1947年8月15日、インドは大英帝国から独立した。英国の支配者たちは、インドを彼らの王冠を飾る宝石だと思っていた (Chandra et al, 1999) が、長きにわたる独立運動のためその決定を余儀なくされた。およそ200年の英国の支配下で、西欧式の学校、大学、文官職、裁判制度、鉄道網や郵便など、いくつもの制度が生まれ、19世紀初めの数十年間には、新しい中間層が現れ始めた。知的職業の成長、都市を基盤とした職業、土地所有権の変化といったものは、大英帝国の介入と、他方では選択の自由の希求という国内での傾向とがダイナミックに影響しあった結果と言える。これらの変化に伴って、家族の構造、女性の地位、子供への態度、幼少期は変化していった。

イデオロギーや哲学を論ずる段階では、こうした変化は二つの文化の接点というより広い文脈において考察される必要がある。つまり、植民地支配者の行動規範は、被植民者に完全に吸収されていたわけでもなければ、埋め込まれていたわけでもなかった。新しい夫婦のモデルは、英国で起こっていたのと同様の変化に深く影響を受けてはいたものの、インド固有の成り立ちと伝統に起因して現れたものだと主張できよう。知識人と制度の出会いが一方的であることはまれなのであり (Ray Chaudhuri 1988; 1995)、たいていの場合——たとえ一人の者が支配の位置にいるときでさえも——様々な制度や価値観、人の生き方を見直すという結果をもたらすものである (N. Chaudhuri 1988)。したがって、植民地化されていたという事実が、高位カーストで中産階級の教養あるインド人たちに、家庭と公的領域の両方に関連する諸々の問題を再考察させるようになった。この論文で明らかにするように、実際にある領域における変化と別の領域における変化の間には微妙な相互作用があった。現象として現れたのは交雑であり、独自のものでもなければ、同一物でもなく、その交雑状態の中で、まさに「慣れ親しんだものが遠いところへ移され、とてつもなく形を変える」のである (Bhabha)。さらに、パロマ・ロイが最近指摘したように、植民者・被植民者間に存在する関係という複雑なもつれの解明にいま一度取り組む現代のポストコロニアルの学者たちは、何らかのレベルで「独自性と模倣という問題」に関わらなければならないのである (Roy 1988, p. 2; P. Chatterjee 1996)。

この論文で私が主張したいのは、世紀の変わり目に西欧的な知的職業に就いていたインド中産階級の子供たちが経験した幼少期は、二つの文化が混交する合成物であったということである。一人のベンガル人女性が自らの子供時代を振り返って書いた日記の分析は、このような二文化の出会いが、しばしば自分のアイデンティティと帰属を確認する上で多くのジレンマと疑問を生じさせるということを示している。たった一人の女性のはるか昔の子供の頃の記憶を掘り所に一般論を語ることは難しい。しかし、家庭内で、また個人の意識下で何が起きているかを理解することで (Nandy 1980; Ray 1995; Chaudhuri 1995)、植民地下の文化の衝突をより深く洞察できるのである。ここで私は、新しい家族のライフサイクルの特定の期間、すなわち当時エリートであったインド文官職 (Indian Civil Service、以下 I.C.S.)——大きく広がる官僚機構の最上層部——の一員の娘の幼少期と少女時代を見ていく。1912年から28年にわたるその期間は、長い年月を経た後でその娘に回想されたものである。モニカは、I.C.S. (ベンガル採用グループ) であったギャネンドロナト・グプトの四番目の子供で、一人娘だった。1970年代、70歳を過ぎたとき、彼女は自分の少女時代を回想してはどうかと勧められ、あまりためらうこともなく、二冊のノートに子供時代の記憶を書きつづった。その詳細な記述の中に、独特な時期であった子供時代や、家族の関係、婚姻、県での生活、ほとんどが英国人で占められていた I.C.S. の中で働いていたインド人が受けたプレッシャーに関して、洞察を導く興味深い内容が示されている。

モニカの記憶は、5歳の子供から21歳の女性になって両親を伴い英国へ休暇に出かけるまでのもので、1911年から1927年にわたっている。細部にまで注意が払われた彼女の呼び覚まされた記憶の語りには、変遷する父親の配属先の年代記になっている。現バングラデシュであるノアカリやロングブルといった県の長官職、ダカヤボルドマンの地方長官職を経て、最後はプレジデンシ地方の長官 (この地方の本部庁舎はカルカッタに置かれていた)<sup>2</sup>に至るまでの記述には、詩人口ビンドロナト・タゴールの歌が響きわたる植民地の市民の邸宅、<sup>シカール</sup>狩の獲物と大きな瓶に活けられた英国の花々で飾られた客間、テントでの野営生活、破壊的な洪水、刺激的な川下りの旅などが、また同時に、伝統と因襲の世界に住む親戚や、父親の英国人同僚の子供たちとのためらいがちな接触が生き生きと描かれている。

この回想記の中では二つのテーマが展開している。一つは、一般的に英国の独占状態にあったエリート専門職に父親が入り込んだことによって家族の中に起こった変化と、同時に生じた緊張関係である。そして二つ目は、若い女性の受けた因襲にとらわれない教育である。ギャネンドロナト・グプトは、オックスフォード大学で学んだことがある I.C.S.の一員であったので、インドと海外の両方で女性教育に関する議論に触れてきたことは疑いない。しかし、ギャネンドロの同僚たちの一部は自分の息子も娘も平等に教育を受ける権利があるという意識を持っていたのだが、彼の態度は違っていた。それは、偏見と、伝統的な考えと、「上品」で競争的でない教育への明快な好みが入り混ざったものであった。モニカの子供時代においては、文官職の生活が現実そのものであったので、モニカの未出版の回想録<sup>3</sup>の考察に進む前に、この論文の最初の章を、インド文官職とそこにかけられる期待がどのようなものであったのか、また、次第に進むインド化やインドの行動様式、価値観が、I.C.S.のメンバーによってどのように取り入れられていったのかを見ていく<sup>4</sup>。

## 天賦の職

「文官職」という言葉は、東インド会社が、軍、海事、教会での雇用を民間雇用と区別するために用いたのが最初であり (Blunt 1938)、1793年の特許状法には「契約により義務のあるインドの文官職」と書かれている (ibid., p. 2)。しかし、英国議会法が指命制度を廃止 (したがって縁故採用も廃止) したのは1853年であり、1855年に最初の競争試験が行われた。これは、この変革のために数年にわたって運動をしてきたマコーリー卿の勝利であった。すぐに実力主義へと社会が動き、それに伴って文官職の社会的枠組みがゆるやかに変化し始めた。1853年の特許状法によりヴィクトリア女王の大英帝国全臣民に競争試験の門が開かれたが、1861年になるまで I.C.S.競争試験をインド人が受けることはなかった (Blunt 1938; O'Malley 1931, p. 208)。文学者であるロビンドロナトの兄ショッテンドロナト・タークルは1864年に文官職に加わったが、1870年になるまで I.C.S.官僚916名の中で彼以外にインド人はいなかった。1871年は「おそらくインド人にとって最良の年と断言していいだろう」(O'Malley 1931, p. 209)、というのは、その年三人の若い男性 (すべてベンガル人) が文官職に入ったからだ。その一人、ロメシュ・チョンドロ・ドットは後にモニカの母方の祖父となる人物であり、二人目ビハリ・ラル・グプトは、モニカの父ギャネンドロナト・グプトの従兄弟、三人目はシュレンドロナト・バナジューで、I.C.S.を解雇された後、インド国民会議<sup>5</sup>の有力なメンバーとなった。

I.C.S.の一員であることは、国の支配において卓抜した役割を担っていることを意味するだけでなく、特異な生活様式や階層的ジェンダー関係、また明確に定義された子育て観を持っていることを示していた<sup>6</sup>。英国人から模範を示されはしたが、インド人文官たちはいくつかの性質を取り入れつつも、他においては修正を加えた。モニカの日記は、I.C.S.の一員であるインド人の生活と時代について、そしてまた彼女が過ごした非常に特別な幼少時代について、意義深い洞察を与えてくれる。エドワード・ブランドによれば、I.C.S.には二つの顕著な特徴があった。一つは「そのメンバーが遂行する多用な任務」であり、もう一つは「人民の間を巡察する」のに費やされる期間の長さであった (Blunt 1938, p. 2)。英領インドの各管区 (後の州) は複数の県に分割され、そこはディストリクト・マジストレート (以下県長官) が管轄していた。県長官は場所によってはコレクターと呼ばれるところもあった。この他に県の役人には、県警部長、郡長 (この仕事は I.C.S.官僚の最初の配属となる例が多い)、郡役人、それか

ら相当数の徴税役人がいた。

モニカの子供時代には、州文官職（うち数名は郡長でもあった）と裁判官はインド人が担っていた場合もあったが、県の役人の幹部のほとんどは英国人で占められていた。若い幹部の日常業務は「行政官、税の専門家、裁判官、秘書、外交官」の仕事と幅広く、その中で彼は橋、道路、運河を築き、学校を作り、「自分自身の刑務所」を管理し、「自分自身の衛生調査官」として行動した（*ibid.*, p. 3）。特別な場合には、若い文官が、警官や、郵便局長、測量士、税務官の仕事、宝くじの管理、また銀行員の仕事までも求められることがあった。さらに、若い文官は優れた騎手であることも義務づけられており、多様な気候にさらされて、テントの中に何カ月も寝泊まりをしなければならなかった。1925年に I.C.S. の一員になった N・B・バナジーによると、県長官は「父親的存在」だった。その多様な職務は I.C.S. についての数多くの書物に規定されているが、その中で最も手強いものは『政令集』である。慣例と形式を重視する団結心という自意識が早いうちに発展したのも意外なことではないだろう（Bonarjee 1970; Blunt 1938; Fraser 1911; O'Malley 1931）。

訓練には I.C.S. に所属する者が屋外の生活で必要とする技術とともに、統治されるべき人々の多くのメッセージや、語られていない意味の解釈の技術も含まれていた。ある文官は顔をしかめながら次のようにコメントしている。

県長官と地方長官たちが抱く共通の不満は、新たに加わった多くの若い男性が、インドではきわめて必須なものである身体の敏捷さや運動の習慣を欠いていることだ。三、四人の英国人がサクソニー程の大きな州に配置された時に、いやがる馬を乗りついで、地方を巡り回るようなことができない役人は、風通しの悪い裁判所で頭痛に悩む裁判官と同じぐらい役立たずである。（Trevelyan 1894, p. 10）

冬の数カ月のほとんどを複数の県を回る巡察に費やされたが、多くの文官たちはこのキャンプ生活に非常に喜びを覚えた。それは一つの通過儀礼であり、ウォーレン・ヘースティングスがベンガルでの地税取り決めの問題に没頭していたときに導入したものだ。こうして、

県の役人の第一の責務が彼の監督下の人民の福祉であるという理解が受け入れられるとすぐに、巡察は県政の極めて重要な部分になった。なぜなら、村人が何を必要としているかを見つけるのに最良の手段は、村を訪れることだからだ（Blunt 1938, p. 4）。<sup>7</sup>

しかも、N・B・バナジーが指摘しているように、しばしばキャンプ生活中の楽しみであった短い遊びの狩猟旅行さえ、「工作上、将来的に役に立つかもしれない知識として地方のうわさ話を得たり」、地方の作物の情報を入手するのに有用でありえた。結局は、「すべてがその個人の能力とその個人のやる気にかかっていた」ということであった（Bonarjee 1970, p. 144）。

同時に、県での生活は寂しいものでありえた。夫婦や子育てへの考え方は、県の幹部職員という公の顔に合わせる形で徐々に変化した。家族はチームのように機能した。役人の妻は夫にやすらぎを与えるだけでなく、夫が様々な任務を遂行する上で極めて重要な存在であり、しばしば極度にストレスの多い状況におかれていた（Callan and Ardener 1984）。妻は、夫のキャンプにたいいての場合同行しなければならなかったし、乗馬の技も必要とされ、召使いたちの監督、小さな家禽の世話、さらに野営中は供給される食糧が不十分なために、常識を越えた大きさの食糧品室の貯蔵を管理する能力も欠かせなかつ

た。モニカの記述には、母親のショルラがキャンプから帰宅するといつも非常に安堵している様子が示されている。マラリアが繰り返し起こるため感染症への抵抗力は弱くなり、旅の間は自宅にいるときの便利さを欠いていた。そのような生活スタイルは、平均的な英国人文官の妻が慣れ親しんだものとはあまりにも異なるものであり、女性たちに違った形で影響を及ぼしたことは容易に想像できよう。インドからたくさんの手紙を書いたウィルソン夫人は、「女性と子供は皆、家にいるときより声が一音か二音高くなっている。女性と子供の感じやすい神経に気候が影響しているのだ」と言っている (Wilson 1911, p. 107)。そしてデニス・キンケードが言うように、「熱、長引くマラリア、蛇、毒性のある虫、これらすべてが在インド英国人の手紙・回想録に繰り返して現れるテーマである」(Kincaid 1973 [1938], p. 226)。風土病に冒された健康、家に留まって学習をする子供からの強制的な別離、夏には避暑地に行く義務がある夫との別離は、一部の人々をして「女性——大勢のしなければならない仕事を持たない女性——にとって、インドは耐え難い」とコメントさせている (Trevelyan 1964, p. 140)。

このような多少厳しい見解は、ラージ (英国人支配者層) の女性であることの経験について書かれたさまざまな回想録や手紙に照らして考察する必要がある。重要なのは、このような女性たちが完全に異なった世界に投げ込まれたということだけでなく、家庭の中にも変化が現れていることに目を向けることである。19世紀の中頃以降、家庭において、家族の関係が変化し、夫婦や男らしさ・女らしさ、そして子供の育て方に関する新しい考え方が持ち上がった。パット・バールが書いているように、「メームサーハブ」(支配者層の女性) 人口の大半を占める中産階級の若い女性は、世間から隔離された幼少期を送り、彼女たちの副次的な役割に適合するような伝統的な学校教育を受けた。そして、実際に彼女たちが担う役割は、——その結果として自分のアイデンティティも——性による労働の分業によって色づけされていた——「少年たちは、自分が指導者、権威の中心であると考えるように訓練され」、一方、女性はつき従う者であり、支配者と被支配者の間の正しい隔たりを維持するように教育され、男性を献身的に支える存在であるという役割分担がされた (Barr 1989, p. 5)。若い少女として、モニカはいくつかの伝統から学ばなければならなかった。そして、天賦の職に属するという幸運に恵まれたインド人の娘であることから生じる彼女への期待は、しばしば本当に煩わしいものであった。

### 子供の目から見た県

モニカの最も古い記憶は1911年に遡る。当時彼女は5歳で、ノアカリ (当時のベンガル南東部の県名) に住んでいた。1892年にI.C.S.に加わった彼女の父親、ギャネンドロナト (以下ギャネンドロと記す) は県長官であった。彼女はその地方について「激しい嵐と、海に近い荒れ狂った数本の広大な河のある土地」であり、海沿いにそびえ立つグラウカモクマオウの木々の間で、風が「悲しげにため息をつき、うなり声をあげていた」ことを記憶している。モニカの家族は大きなバンガローに住んでいた。<sup>8</sup>それは二階建てで、「天井の高い部屋とベランダがいくつもあった」(p. 2)。モニカは次のように書いている。

一階には、客間、食堂、父の書斎、化粧室がいくつもありました。寝室は二階に数室あり、家の長さに延びわたる奥行き深いベランダがありました。ベランダは白い石で作られた手摺がついていて、ところどころにアーチ型の柱が立ち、床は赤いセメントでした。ベランダの左側には石の階段があり、一階に続いていました。<sup>9</sup>

ベランダはバンガローには必須のものであった。というのは、ベランダは熱・寒さ・埃・風から家の大切な壁を守るだけでなく、住人たちが「くつろいだり、煙草を吸ったり、歩いたり、時には食事をとり寝たりさえする」ためにも使われたからである (T. Roger Smith quoted in King p. 46)。モニカと「いつも一緒だった」弟のジテン (愛称ウィリー) の二人にとって、ベランダは「一日の最良の時を過ごした」遊び場だった。家は四方を野原で囲まれていて、面白いことに、県長官の家の敷地を外から区別するための囲いの塀はなかった<sup>10</sup>。

ギャネンドロは熱心に庭の手入れをしていた。彼は庭の一部を柵で囲い、薔薇や、他には一年生植物をその中で育てていた。若い頃のモニカにとって召使いたちは重要な役割を果たしていて、おそらく親兄弟以外で最も影響しあった人々であろう。アーヤー (子供付のメイド)、マーリー (庭師) そしてチャプラーシー (事務係)<sup>11</sup> は、モニカの回想録に頻繁に登場する。召使いについては、当時の英国人女性による口述記録の回想録にも自叙伝にも非常に細かく言及されている——自分の幼かった頃を回想する人々は、太陽の日差しを浴び、新鮮な空気の中でアーヤーや父親付きのチャプラーシーたち (チャプラーシーたちが大のお気に入りだったことは明らか) とのんびりと過ごした日々の楽しい思い出を持っている (Barr 1989; Burke TS n.d.; Donaldson TS 1982; Portal TS, n.d.; R. Chatterjee 1996)。これとは対照的に、大人の女性たちは、およそ12名もいる召使いたちを監督したり、コックたちの盗みを防いだり、食料品室に豊富な蓄えを維持することに不満をこぼしている (TS of interviews with Mrs. Mullen, Lady Pawsey and Mrs. Pengree on September 15, 1973 by the Centre for South Asian Studies, University of Cambridge; Mrs. Lamb, n.d.; Mrs. Showers-Stirling, TS, 1961)。

ノアカリでは、卵とトースト、それに「ウィリーも私も大きらいだった大きいカップの牛乳」という健康的な朝食をとった後、庭で何時間も過ごすというのが典型的な一日だった。年長のアーヤーと「私たちがこの上なく好きだったチャプラーシーの一人」に伴われて、二人は野原を探検し、遠くで日向ぼっこをしている大とかげを離れて見ては驚いた。午後の昼寝とお茶——お茶には「丸い缶に入っている素朴なおいしさの」ショートブレッド・ビスケットがあったので、きれいな牛乳があっても我慢できた——をいただいた後は、ギャネンドロのポニーの馬車に乗って出かける時間だった。

父はよく母を助手席に乗せて馬車を走らせました。私は二人の間の床にクッションを敷いて座られました。ウィリーは馬丁と一緒に後ろの椅子に座らなければなりませんでした。(p. 9)

ノアカリは小さな県だったので、ギャネンドロと妻シュルラが社交的な場を持つことはあまりなかった。モニカの両親が客をもてなすときは、食事は普段食べている物に手を加えた物で、たとえばランチはダル (レンティス豆のスープ)、ライス、野菜、魚のカレーだった。食事についてモニカは次のように



6歳のモニカ (右) と弟のジテン (左)

言っている。

私たちの食べ物は東洋と西洋が妙な感じで混ざっていました。夕食は英国風とされていましたが、地元のコックによる下手な料理でした。スープに続いて、主菜にはマトンかチキンか魚がたくさん野菜サラダと一緒にい出され、続いてプリンが出されました。プリンは蒸しプリンも焼きプリンもありました。私たちの食べ物はギー（精製バター）や純バターやマスタード・オイルで調理されていたので重くなりがちでした。おそらく、ヨーロッパの人々と交流のあるインド人が夜に英国風の食事をする習慣を取り入れたのは、こうした理由があったのでしょうか。なぜなら英国人の食事はとても軽いので消化に良かったからなのです。（pp. 10-12）

モニカと兄弟たちは、習慣の違う食べ方だけでなく、異なる料理にも早いうちに適応した。父親のベンガル人部下（父より年配だったが）の家では、「つとめてお行儀を良くする必要はなかった」。食事に招かれたときは

私たちはアッサナー（四角いマット）の敷かれた床に座り、ターリー（銀や鐘銅やステンレスで作られた皿）に盛られた食べ物を食べました。床はきれいになっていて汚れがなく、食べ物——ジュティマー<sup>12</sup>とその娘が作ったのですが——は美味しかったです。私たちへのすばらしいもてなしでした（p. 89）。

ICS.官僚ロメシュ・チョンドロ・ドットの四番目の娘だったモニカの母シュルラ・グプトは、幼い頃から西欧の伝統の影響を受けて育った。シュルラと三人の兄弟は、1886年に両親と一緒に渡欧し、ロンドンのケンジントン・ガーデンに家族は居を構えた。妻マトンギニは英語が話せなかったため、ドットはコックと家政婦に加えて、「以前に召使いを雇ったことのある婦人の何人かに頼んで」女性の付き添いまで整えた（Dutt 1986, p. 118）。かくして数年後には、シュルラは比較的容易に、彼女の社会的な義務と自分の親類への責任とを賢明に両立させながら、ICS.インド人役人の妻の役割に適応することができた。つまりギャネンドロの妻シュルラは、夫婦の絆、コンパニオンとしての妻のあり方、アイデンティティ発見のため子供たちは一人にされなければならない幼少期の育児というような、進展しつつあった考え方に順応するのにほとんど困難を覚えなかった。ラージ（統治者側）の女性の回想録やインタビューの多くは、似たような母親の振るまい方のことを述べている。それは、母親が「理想化された存在で、穏やかで、愛らしく、道徳的権威をもって世話をする存在」ではあるが、それにもかかわらず「子供の日常生活からは遠ざかっている」ような像である（Brown 1993, p. 99）。子供たちは親から独立することを奨励され、あるいは雇われた召使いに任せてしまい、妻たちは多くの時間を夫の忙しい生活——それには、仕事上の接待や、キャンプ生活への参加や、様々な慈善活動や社会事業活動等の象徴的役割も含まれていた——に「合わせる」ことに時間を費やした。同時に、休暇はシュルラの姪や甥が大勢訪れて陽気に騒ぎ、家にヒンディー語、ベンガル語、英語の興奮した声が混ざり合って響きわたる楽しいひと時であった。

父親について、モニカは、「母と同じ社会的環境の出身ではなかった」と書いている。というのは、ギャネンドロの父親は県判事であり、州採用の文官職であった父親の兄に育てられたからである。カルカッタのメトロポリタン・カレッジを卒業した後、ギャネンドロはICS.に入るための試験を受けるために英国に行くことを熱望していた。だが、祖母が彼が海外へ行くことを許さなかったため<sup>13</sup>、彼は数

年間自分の決心を延期しなければならなかった。最終的に、ジェタモシャイ（父親の兄）や友人の助けによって彼は英国に滞在する資金を得、1892年にI.C.S.の試験を受け、インド人の中では二番目の成績を取った。長い年月を経て、モニカは父親が給料からかなりの額を自分の様々親戚たちへの援助に使ったことを思い出している。

ロメシュ・チョンドロはブランモにはならなかったが、ブランモ協会<sup>44</sup>には強烈に影響を受けていた。シュルラとギャネンドロは、通常の結婚式の後にブランモ式で結婚式をあげた。したがって、彼らの子供たちが特定の宗教に従って育てられなかったことはそれほど驚きではなかった。むしろ母親は規律の厳しい人で、子供が小さいうちに良いことと悪いことの区別を教えた。シュルラの純真な道徳は、かなり早いうちから子供たちの目にもはっきりとしていた。

両親は私たちに宗教の話をするには決してありませんでしたし、宗教的な教育をすることもありませんでした。もし私たちが悪い振るまいをしたら、正され、決して同じ過ちを繰り返さないように言われました。私たちは嘘をついたり悪いと分かっていることをしないように、あるいは自分がされたら嫌なことを他人にしないように指導されました。(pp. 82-3)

モニカは特に触れていないが、彼女の回想録を緻密に読んでいくと、シュルラは自分の役割を忠実に果たす母親であったが、子供の肉体的必要は家の召使いが面倒を見て良いとも感じていたことも明らかになる。モニカは、母親が午睡をとっている時や、両親がブリッジをしにクラブへ出かけている長い夜や、新聞を読んでいる時や単に文官と「雑談をしている」時にも、ウィリーと自分が母親をうるさがらせてはいけないと思ったことを書き記している。

学校生活最初の二、三年間、モニカの三人の兄シュディとニディとディレンは、後にカルカッタの全寮制の男子学校であるヘースティングス・ハウスに送られるまで、地元のジラ（県）学校へ通った。一つの県にいる文官の数はあまり多くはなかったので、I.C.S.のメンバーは同僚の福祉に関わることもあった。モニカが初めて人の死を経験したのは、ひどく具合を悪くした若い英国人警官が自宅の予備の寝室に連れて来られたときだった。

父は召使いたちに手伝われながら、そのかわいそうな若い男の人を看護しました。英国人の医師が、患者を診るために一日に二度、三度とやって来ました。医者とは献身的に介護をして尽くしたのですが、それも実らずその青年は亡くなりました (p. 28)。

四日後、弔意を示すピロードの布が家に下げられた。召使いたちはその若い男性のキスマット（悲運）を哀れんだが、彼が自分の土地から遠く離れたところでサーハブ（目上の男性）に看護されていたことは実に幸せなことだと言いついていた。パンジャブの文官の妻で19世紀後期の有名な在印英国人作家であるフローラ・アニー・スティーラーは、自叙伝の中で「県役人は自宅に予備の寝室を備えるよう求められ、医者はその寝室を自由に使うことができ、特別な手当を必要とする患者を家に入れなければならなかった」と想起している (Steel 1930, p. 130)。数年後、父親がロングプルの県長官に任命されたとき、モニカとウィリーは英国人警察本部長の三人の子供たちと仲良くなった。修道院学校に入っていた後半の数年間、モニカは人種的偏見を経験したのだが、子供の時は、階級や人種的背景に関係なく自分自身の基準で人々を見るように育てられた。

ギャネンドロの子供たちが様々な状況に容易に順応できたのは、おそらくシュルラの影響であろう。

魅力的で自信を持った女性であったシュルラは、客のため美味しい料理でもてなし、応接間を整えていた。

その応接間は趣味良く設えられており、落ちついた色合いのカーテン、ソファが一つと椅子が数脚ありました。木製の台がいくつかあり、その上には真鍮製の鉢にアジアタムが植えられていました。写真や灰皿が椅子と椅子の間にある茶卓に置かれ、豹皮や大きな虎の皮が両方の部屋に敷かれていました (p. 31)。

電気や水道や水洗トイレがなかったので、県長官の召使いには、ビシュティ (水運び) 一名と下肥を片づけるための清掃係一名以上とパンカーワラー (扇風係)<sup>15</sup> 一名がいた。パンカーワラーが棒についた紐を引くと、天井の端から端まで伸びている棒についた大きなフリル付きの布が風を起こし、夏の暑さを和らげた。英国人役人の妻たちは夫の乗馬や狩猟にさえも参加することが求められていた (Diver 1907; Donaldson 1982; Portal n.d.)。役人の娘としてシュルラは小さいうちから乗馬を学び、婦人用の鞍を付けて男性たちに遅れをとらずに、「父と父の友人たちと一緒に、道なき野山を長い間馬に乗って走った」。シュルラは猟はしなかったが、熱心な射手である夫に付き添って狩猟に出かけ、気楽にできるテニスなどのゲームをして遊んだ。

県のバンガローすべてにおいて、一階に県長官の仕事部屋を一部屋設けることが指定されていて、町の役所に行く前に、二、三時間程は人々がやってきて彼に面会できるように確保されていた。今日でも激しい嵐と高潮、津波で知られる沿岸の県では、ギャネンドロの仕事の大半が、その災害の防止策を講じることであり、また救助に関わることであった。しかし、冬の数カ月は視察旅行と野営の期間であり (Lady Maxwell TS, CSAS; Diver 1907; Scott TS, 1951)、視察旅行では家族全員を連れ召使いたちが随行し、県長官は人民のところを訪れた。というのは、「視察旅行は統治者側の人間が村に入る一つの方法であり、村人たちが英国の帝国主義を感じる時であった」 (Lind 1988, p. 20)。モニカは父親と旅行に出かけるときの興奮を次のように示している。

川岸と、からし菜や野菜や稲の生える田畑に囲まれた、広々とした場所にテントが張られました。木が数本立っていて、テントに陰を落としてくれました。たいてい野営では、私たちが泊まる両開きテント二つと、召使いたちが泊まる広いシャミアナ (天井が平たい造りのテント) が一つ張られました。テントの中で、私たちは食事をとり、父は訪問者や村人たちと会いました。多くの方が何マイルも離れたところからやって来ました。さらに、片開きテントもいくつかありました。それらは、召使いや番人の寝泊まりに使われたり、また料理場として利用されるテントでした。野営中の何日か、たいてい土地問題や灌漑問題などの村同士で起こる言い争いを解決するため、父は一日中家を空けました。父は地元の役人に付き添われて馬に乗って一回りしました。 (p. 59)

モニカとウィリーがつねにチョウキダールに伴われて田舎を歩き回り、蝶や野の花を探していたのに対し、二人の兄たちは狩に出かけていた。夜は焚き火で暖をとり、ギャネンドロが軽く一杯飲んでいる間、地元の狩人は背筋のぞつとするような話で集まった人々を楽しませたものだった。

地元の地主が、果物やナッツや菓子を手みやげに訪れることは珍しいことではなかった。つまり、一般に県長官は人々のマー・バーブ (父母または保護者) とみなされると考えられており、それに従って

贈り物がなされたのだった。ギャネンドロはそのおしるしの贈り物を受け取った——モニカとウィリーにはがっかりするような物だった！一週間ぐらいして、テントが畳まれ、雄牛が引く荷車に荷物が積まれて、次の野営地に行く準備がされた。時折ギャネンドロは、妻、モニカ、ウィリーを一緒に乗せて、一頭立ての二輪馬車を走らせた。その時兄たちは、地元のポニーに乗って走った。道がないときには、地方長官とその家族は象の背に乗ったり、雄牛の引く荷車に乗って旅をすることさえあった。モニカの乗馬の腕が上がると、父親は彼女にポニーを買い与えた。モニカは大変そのポニーをかわいがり何日も何時間も、道なき野山をその背に乗って探検した。豹が暴れ回っているときには、村人たちの代表が県長官殿に撃ってくれと求めた。ギャネンドロか息子の誰かが狙撃に成功し、喚起の声があがった。村での仕事に精を出す間も、県長官は県内の他の場所で起こっていることがすぐに分かるようになっていた。一週間に一度本部から手紙が届くと、県長官は事務官とともにしばしば夜遅くまで野営地に備えた机に向って、書類に目を通した。時々、手紙と一緒に新鮮な野菜——小さなラディッシュ、レタス、新鮮な豆、キャベツなど——がロングプルの菜園から届くことがあり、モニカとウィリーを喜ばせた。

ノアカリおよびロングプルの県長官、ダカ地方の長官、このどちらの職に就いている場合でも、ギャネンドロの重要な役割はコレラのような伝染病や洪水を防ぐことであった。1919年、ダカ地方の長官になった直後に、ギャネンドロはモニカを連れて洪水の被害を受けた場所へ視察に出かけた。

私たちはある場所では一頭立ての軽馬車に乗り、それから堤防の上をかなり歩きました。堤防の両側で、水が一面に広がり、村々は水に浸かって、小屋の中にまで浸水し、大きな木の幹の半分の高さまで水かさが上がっていました。牛や山羊の屍骸が水に浮かんでいるさまは、最もつらい光景でした。私たちは一マイルほど歩いて、ついに、しゅろの葉と切った竹で作った避難小屋と堤防の上に張られた小さな野営のチョーダリー（片開きのテント）のあるところに来ました。政府の役人と地元の国民会議の活動家の人たちがチョーダリーをあてがわれていて、村人は臨時の避難小屋に避難していました。父は役人と活動家たちの両方と話をし、村人たちに最大限援助を施すよう、協力して働いてくれと頼んでいました。(p. 138)

洪水が特にひどかったある年、シュルラは犠牲者のための資金を調達するために劇を催すことにした。彼女は、ダカを訪れていた甥や姪の人材を利用して、ベンガル語の劇『ドゥルボ』を上演することにした。当時、ロビンドロナト・タゴールの舞踊劇を上演することは大変流行していた。下稽古は毎晩家で行われ、後には劇が上演される予定の公会堂でもリハーサルをした。劇は大入り満員で、台詞を忘れる人もなく、感動的なほど多額の援助資金が地方行政長官のもとに集められた。劇はベンガル語で演じられたが、モニカと兄弟の間では——実際には両親も——ピジン・ヒンディー語で話していた。それは召使たちと話すときに使われるものと同じ、様々な言語が入り混じった言葉であった。

モニカの非伝統的な成長——年長になるまで正規の学校教育を受けなかったこと、ピアノが大好きだったこと、自然や環境に交わる能力があったこと——は、彼女がただ一つの文化にのみ属していたのではないということを意味した。ジュデイス・ウォルシュは、英国支配下のインド人幼少期についての研究の中で次のように述べている。

19世紀および20世紀にインドで育った子供たちは、少なくとも二つの異なった文化の伝統と出会った。西欧による占領の中で機能できる大人になるために、子供たちは両方の伝統を自分たち

の生活の中に取り入れるように期待された。子供たちがジレンマに陥るのは、背反するとも言える異なる二つの文化の要求を受け入れ、それに順応する必要を迫られるという点においてなのだ (Walsh 1983, p. 51)。

ウォルシュの事例研究はほとんどが少年に関するものではあるが、彼女の言うジレンマはモニカのような少女にも影響を与えている。そのような印象的な例は、モニカの母方の祖母 R・C・ドット夫人マトンギニが訪れたときのことだ。1920年代の初めに、ドット夫人は娘のシュルラを訪問するように勧められた。その時シュルラの夫は、チンシュラに本部を置くボルドマン地方の地方長官をしていた。マトンギニは、インド文官職のインド人メンバーの妻であり、夫とともにヨーロッパと英国を一度以上訪れているにも関わらず、英語がほとんど分からず、伝統的なヒンドゥー教の寡婦の守るべきしきたりを遵奉していた。モニカは下記のように書いている。

ディディマ (母方の祖母) は伝統を重んずる人でした。祖母が来るときはいつもバラモンの特別なコックが雇われ、食事を用意して階上の彼女の部屋まで料理を運ぶという習慣になっていました。新しい調理用具が購入され、召使い部屋の空気が数多くあったので、そのうちの一部屋が白く塗られ、きれいに掃除がされて台所に改修されました。父は祖母が個人的に必要とするものすべてを管理しました。父は母を信用していなかったので、管理を任せなかったのです。ディディマは離れの二階の客間を二部屋使っていました。彼女が食事をするときにはいつも、母か父のどちらかがその部屋へ顔を出していました (pp. 208-9)。

モニカは、1909年に寡婦になったその祖母が、小さくて優美な女性で、冬には絹のサリーを身にまとい、夏には飾り縁のない綿のサリーを着ていたことを記憶している。夕暮れ時には、ドライブ (一頭立てのポニーの軽車はその時までにはオースチン車に変わっていた) に出かけることが家族の恒例行事になっていたが、そこにディディマも加わった。彼女は「幹線道路 (カルカットとデリーを結ぶ)」を下る遠出の間、気持ちよく座っていた。モニカは祖母のことが好きだったが、その反面祖母がいると面倒だとも感じていた。モニカ自身が子供の時に受けた教育は、異文化が混在し、時には混乱していたので、ベンガル人である祖母は様々な点でその教育の対局にあるような存在だった。

私はディディマに対して複雑な感情を持っていました。私は彼女が大好きでしたが、彼女がいる時は話し方とお行儀にもものすごく気を付けていました。ディディマはどこにいても、自分の息子と一緒にであろうと、私たちと一緒にであろうと、自分以外の家族の人たちから完全に独立した人生を送っているという印象を与えました。彼女の大切なものは、自分の息子のオジョイでした。  
(p. 211)

モニカは、同様に伝統的な寡婦であった父親の妹の訪問が祖母の訪問以上に楽しみだった。彼女は寡婦であるためのあらゆる禁止に甘んじ、髪を短くして一重の縫い目のない布だけを身にまとっていた。

ピシ (父方の姉妹) は一日に一度の食事 (昼食) しかとりませんでした。それは自分で作ったものでした。他の時は、果物を食べたりミルクを飲んだりしていました。ピシがうちに着くと、その日から私は彼女と一緒にいて、彼女の中庭にある小さな籐椅子に腰掛けたり、彼女が動くのを見ていたり、私のめっちゃめっちゃなベンガル語で一緒に活発なおしゃべりをしたものでした。彼女

は私の文法的な間違いを正しましたが、会話はいつも一方的なものでした。私は、彼女が長い時間お祈りをしたり他の儀式に没頭しているときだけは、彼女の邪魔をしないようにしました。母はたびたびやって来ては、木陰の椅子に座ってピシとおしゃべりをしていました。(pp. 213-5)

菜食料理の達人であったモニカのピシは、美味しいピクルスを作っていた。そしてモニカは、父に何度か彼女から料理を習うように言われたが、「残念なことだが、あまり気にとめなかった」。ピシが帰宅する日が来ると、モニカは悲しくなり口をきかず、あまりにも早く過ぎてしまった日々を思い返したのだった。若い少女モニカは、ベンガル語が十分に話せなかったし（モニカと兄弟たちは、召使いたちから学んだピジン・ヒンディー語で会話していた）、料理の習慣、服装や普段の振るまいもことごとく異なっていたにもかかわらず、年輩の女性の親戚に親近感を持っていた。おそらくこの女性たちは、自分はどこに属する人間なのかという安堵感をモニカに与えたのだろう。つまり、つかの間ではあるが、自分は深く根を下ろした文化の伝統を持つものだとして認識させたのだ。なぜならば、モニカの子供時代は、変化というものが、楽なことでも明快な結果として現れ出るものでもないような、二つの文化が混在する色合いを反映していたからである。

### 因襲に反した教育

モニカが学校に通うまでに、モニカの父と類似した職業につく父親を持つベンガル人の少女たちは、増加しつつあった教育機関で教育を受けていた。西欧化された人々はミッション・スクールと修道院学校を好んだが、愛国心の強い家族はインド固有の教育機関を支持する方向にあった (Borthwick 1984; Karlekar 1991; Murshid 1982)<sup>16</sup>。したがって、R・C・ドットもその娘婿であるギャネンドロも、自分たちは幅広く学び教養を身につけることを理想としていたにもかかわらず、女子の教育を軽視していたことは非常に興味深い。モニカの母シュルラは、最初ミス・ピゴットの経営するカルカッタの寄宿学校で授業を受けたが、1885年には家庭教授に変えられ、その同じ学校からの派遣教員から裁縫やお絵かき、ピアノを習った。R・C・ドットは一番下の娘の教育を監督したが、ベンガル語の教授は叔父に任せた (Sen 1971)。女子および女性の教育に対する家族の姿勢は、1903年に具合を悪くしていた最年長の姪シュシャマに宛ててシュルラが書いた手紙にはっきりと現れている。一般的に、教育を受けることによる圧迫が健康を悪化させると考えられていたが、シュルラもこれに同調し、姪に勉強をあきらめるよう説いている。

他の何よりも健康が第一だということを忘れてはいけません。もし私があなただったら、両親の反対がなければ間違いなく学校をきっぱりとあきらめます。あなたには十分な才能があるのだから、何か別のことで没頭でき、しかもそれほど疲れないようなことを始めればいいのです。(Sen p. 623)

さらにシュルラは強い口調で、「今のシュシャマの健康状態で」勉強を続けるなんて「気が確かとは思えない」と言っている。そしてどんな場合でも、もし彼女が男の子だったら「死ぬ覚悟でやる」という態度に駆り立てられて「試験を受けた」だろうが、「神の意により女の子に生まれたのだから、もっと気楽に生きなさい (ibid.)」と説いた。面白いことに、シュシャマはこの叔母の助言をまったく気に留めず勉強を続け、最も有名なミッション・スクールのロレット・ハウスを卒業した<sup>17</sup>。皮肉なことに、

シュシャマにフランス語と英語を指導したのはシュルラの夫ギャネンドロだった。

二、三年後、娘モニカは学校へ通うようになったが、モニカの両親はとうてい支援的とは言えなかった。8歳ぐらいの時にモニカは、ロングブルでのひどい学校教育について、もの足りない気持ちを次のように示している。

それまで私の正規教育はまったく無視されました。私はベンガルの女子学校へ短期間行かされていたのですが、先生達がひいきして私の間違いを正さないから私が甘やかされていると言って、母は私を家へ戻してしまいました。私は小さい頃から父と一緒に英語を読みました。父は詩が好きで、ロングフェローやテニスンと一緒に読んだことを覚えています<sup>18</sup>。(p. 90)

英国人の医務官夫人の所へ授業を受けに行かされたときに、モニカは初めてピアノを弾く体験をした。彼女は次のように記している。「私のピアノへの愛情が大きくなり始めたのは、これらの初めてのレッスンからでした」。この頃、ギャネンドロは、シロンにある丘陵地帯の避暑地にアップランズと呼ばれた美しい邸宅を購入し、モニカとウィリーはロレット・ミッション・スクールへの入学を許可された。シュルラがシロンへ引越をしたので、最初の二、三年は二人は家で勉強をしなければならなかった。しかしまもなくギャネンドロは、二つの家を維持し、かつ長男のシュディをオックスフォード大学のパリオール・カレッジで勉強させるのは経済的にたいへん負担になると感じ始めた。アップランズは売却され、モニカはアイルランド人の女性家庭教師ミス・リドウルズに預けられた。モニカは彼女にとっても愛着を感じた。二人はシロンで下宿生活をし、その家庭教師は「私の話し方とテーブル・マナーに非常に注意を払った」<sup>19</sup>。モニカは、ミス・リドウルズには愛情があり心遣いをしてくれると感じたが、他方修道院学校での経験には正反対の感情を抱いた。

私は学校ではとても不幸せでした。インド人とアングロ・インディアン<sup>20</sup>女子との間には大きな相違がありました。最高にひどかった仕打ちは、インド人の女子が全員一つの学級にまとめられたことです。ある朝、学校に訪問客がありました。その女性は私たちの教室へ連れてこられ、同行していた修道女に、これはインド人たちの教室だと伝えられました。幼い私でも、自分たちの立場を屈辱的に感じました。私の育った家では、来訪者にインド人と西欧人の区別をしたことはなかったのです。(p. 107)

モニカはこの出来事を含め、全般的な不満足感を母親に報告した。シュルラは、I.C.S.の他のインド人文官の妻であるK・C・デー夫人と一緒に女子修道院院長に面会し、ヒンドゥー教徒インド人とキリスト教徒のアングロ・インディアンの間にある差別について苦情を訴えた。モニカの冷ややかな反応は、二つの文化が混在することに対する隠れた不安——そして心理的な混乱——をもたらした。

当時英国人の統治があまりにもしっかりとインドに定着していたので、母とK・C・De夫人の抗議はあまり気に留められませんでした。しかし、ほんのわずかですが、修道女と教員たちの私たちに対する態度は、改善されました。(p. 108)

興味深いことに、モニカの兄ニディとディレンは、入学したシロンの全寮制男子学校聖エドモンド・カレッジで差別を経験することはなかった。二、三年後、1919年にギャネンドロがダカの県長官になったおり、英国人会員だけで編成される県のクラブに名誉会員の地位を進呈されたが、彼はそれを受け入

れなかった—その県には彼より上位のインド人はいなかった—。彼は正規会員となる資格を望み、それが無理なら入会しないと主張した。白人の砦壁は厚く、会員規則を変更する準備はできていなかったし、また県長官の方も、彼にとって受け入れがたい譲歩と思われるものを受け入れることはできなかった。それからすぐ、ギャネンドロはダカ地区の地方長官を任じられたおり、彼の家族は官舎に引越をしないことに決めたが、より多くの接待をしなければならなかった。ギャネンドロはすばらしいテニスの腕前の持ち主であり、その当時住んでいた敷地内にはテニスコートがあった。彼はテニスの夕べを準備し、ソフトドリンクと食事を振るまい、「給仕もいる」パーティーまで企画した。14歳になっていたモニカは、その時テニスを初めて経験した。ピアノのレッスンは地元カレッジの英国人校長の元で再開された。モニカは地元の修道院学校へ送られたが、彼女の興味の的がピアノやテニスや乗馬にあるのは明らかだった。彼女の父親が1912年にボルドマン県地方長官としてチンシュラに転任になったとき、彼女はチョンドンノゴルの修道院学校へ通わされた。彼女は次のように言っている。

私の正規教育は、いつものように完全にないがしろにされました。私はチョンドンノゴルの修道院学校へ行かされましたが、そこで勉強したことはまったくつまらないことでした。英語は夕どきに父と読みました。それは私にとって貴重なことでした。ベンガル語は家庭教師に教えてもらいました。(p.178)

モニカが自分で受けた教育を、豊かな正規でない教育と、退屈な体系化された正規教育とに区別しているのは大変興味深いことだ。明らかに、彼女の両親も同じような区別をし、彼女のピアノの才能を重視した。彼女はアップライトのピアノを買い与えられ、修道院学校でレッスンを受けた。同時にギャネンドロとシュルラは、女の子も少なくとも二、三年は学校に行く必要があると承知していたので、ダーズリンにあるロレット・ハウスにモニカを入れた。両親は、モニカが「寄宿生活に馴染めなかったので」、仲の良い親族のもとに下宿できるように取り計らった。モニカにとって学校生活は不快なものであった。しかし、そのダーズリンの修道院学校で、彼女は「ほんの数名の選ばれた生徒にしかピアノを教えない……すばらしいピアニスト」であったマザー・ジャメヌに出会ったのだった。

モニカは初めてその修道女に出会ったときのことを上手い語り口で語っている。彼女は近々トリニティ音楽カレッジの初級の試験に臨むため準備をしていた。受験希望者全員がマザー・ジャメヌの前でピアノを弾かねばならなかった。モニカが緊張して音楽室に入ると、

マザーは姿勢良くピアノの右側の椅子に腰掛けて、私に弾き始めるように言いました。私は様々な音階で弾き始め、それからマザーを見ました。すると彼女は練習曲と楽曲を続けて弾くように合図をしました。私が演奏している間、彼女の美しい顔には感情がまったく現れていませんでした。私は弾ける曲すべてを弾き終わり、黙って座っていました。マザーは私に試験を受けるのは無駄だと優しく言いました。私は間違った教え方をされているから試験には落ちるだろうと言うのでした。私はひどく取り乱しました。と言うのは、私はこの時までにはピアノへの愛情をつのらせてきていたからでした。その日の夕方マザーは私を呼び、私を彼女の生徒に加えることを決めたと伝えました。私は大喜びでした。私は若かったので、彼女の生徒の一人に選ばれたことへの希望と喜びは、私の顔にはっきりと現れていたに違いありません。(pp.183-5)

先生の厳しい監督の下で行われたモニカの練習—ダンパーペダルは使用しない、ぼやけた音を出さ

ない、マザーの満足が得られるまで両手では弾かない——は、すぐに成果を上げた。彼女は初級の試験を受けずに入学が認められ、優秀な成績で中級に合格した。彼女は中上級と上級を受けても同様な成績で通ったのだが、家族は奇妙にも無関心のようにだった。

私の成功に対する家族の無関心は私の心を痛めました。違う反応を示したのは父だけで、彼はいつも喜んでくれ、私の成績表や試験官たちの評価を誉めてくれました。(p. 188)

しかしモニカの母親は、無関心であったばかりでなく、モニカが邪魔されず好きに練習したいと思っても自分の寝室にピアノを置かせることさえ許さなかった。代わりにピアノは客間を飾った。つまり上品な生活様式にとって完璧な調度品となったのだ。結果的に「練習している間は、プライバシーもなかったし、相当気が散った」(ibid.)とモニカは書いている。モニカの練習時間が日毎に長くなり、ピアノへの気持ちが高まるにつれ、両親は彼女がマザー・ジャメヌの転任先であるカルカットのロレット・ハウスに旅行することを許した。長い時間を要する旅だったが道中目新しいものの発見に欠くことはなかった。まず、広大なガンジス川を小さなベンガル風の船で渡らなければならなかった。それは地方長官の住居にある船着き場につながり止められているものだった。

私がチャプラーシーに伴われてちょっとためらいながらボートに乗り込むときには、常に両親は船着き場の脇に立っていたものでした。父は船頭たちに川を渡るのは安全なのかといつも尋ねていました。船頭たちは必ず、もし安全だと思わなかったら漕ぎ出さないと答えていました。川を渡ってしまうと、私は市場を抜けてノイハティ鉄道駅まで歩き、そこでシアルダ駅行きの列車に乗りました。付き添いのチャプラーシーは三等車に乗りました。シアルダ駅から私はティッカ・ギャリー（小さな馬車）に乗り、ロウアー・ロードン通りにあるダダ（お兄さん）の家へ行きました。しばらく休んでから早めの昼食を取り、レッスンのためにギャリーに乗ってロレット・ハウスに行きました (pp. 192-3)。

モニカの気がくじけたときには、マザー・ジャメヌが彼女の気持ちを奮い立たせた。というのは、彼女はモニカにピアノをあきらめると言ってほしくなかったからだ。天気が良いと、モニカとチャプラーシーはチンシュラまで戻り、心も体も疲れ果てて帰ってきた。モニカには週に一度以上の旅行は不可能で、そのことが彼女のピアノの訓練に支障を来した。しかし、モニカが16歳を少し過ぎたときに、マザー・ジャメヌが彼女にトリニティー・カレッジの資格試験を受けるように勧めた。期待に反することなく、彼女は「大喜びできるような成績ではなかったが、何とか合格できた」。そのまさに翌年の1923年、父親がカルカットに管区の地方長官として配属されたとき、モニカは大変喜んで週に三回の授業を受けるためにカルカットへ戻った。

## 結論

モニカのピアノへの愛情や乗馬の技術とテニスの能力は、父親のギャネンドロによって積極的に励まされた。ギャネンドロにとって、子供の中で唯一の娘が、同じような社会的地位にある英国人女子と同じたしなみを身につけることはふさわしいことであった。しかし、ギャネンドロは完全な親英派ではなく、ベンガル語を維持することに留意し、ベンガル語で数冊の小説も書いた。また彼は、自分の就いて

いる職業が要求したものと非常に異なった育ちであったことの痕跡とも言える、貧しい親戚や友人を拒むことをしなかった。しかし同時に彼は、娘が学校を卒業することも、卒業試験を受けることも許すことはなかった。明らかに、ギャネンドロは女子教育に関してシュルラと同じ見解を持っていた。あるいはシュルラは、女子と男子の役割は区別されるべきなので、女子と男子は別の教育課程に置かれるべきであるという、当時の一般的な考え方と一致する夫の意見に賛成していただけなのだろうか？モニカの人生はひとつの隠喩として—異文化の出会いのシンボルとして—理解することができる。土着の伝統の中で育てられた後、労働が厳密に性分業化されている I.C.S. の気風という異文化へ適応していった父は、公然と女子の正規学校教育に反対しつつも、娘のピアニストとしての技術を完成させるために、娘に、長い時間を要し、時には危険な旅も推奨した。モニカの思い出話の中には、一つの文化の中で磨き上げられることも、また父の職業生活によって積み重ねられた色々な活動に完全に精通することもない、彼女のジレンマが—ほんのわずかではあるが—現れている<sup>21</sup>。中産階級上層部の多くの英国人女性によって行われていたように日記を書く伝統を続けたことによって、モニカの書き記したものは事件や出来事を年代順に並べた正確な記録になっている。しかしこの豊かな記述は、モニカの潜在意識内にある不安や緊張を、本人の意図しないところで表面化させている。たとえば、自分のピアノ演奏への母親の興味の欠如に対して感じられた心の痛み、母国語があまり話せずむしろ支配階級の言葉に流暢であることへの当惑、また、学校で差別されたことへの行き場のない怒りなどに現れている。

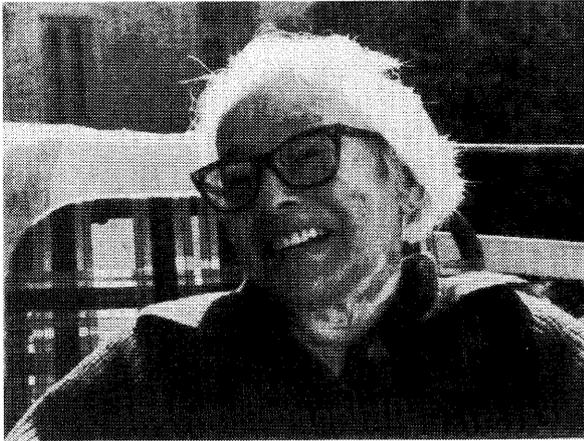
時を経て50歳を越えたとき、自分でベンガル語を学習することによって、モニカは人生にバランスを取り戻そうとした。彼女は R・C・ドットによるシヴァージーの伝記小説『マハーラーシュトラ・ジーヴァン・プラバート』を英訳するのに十分な能力を身につけた。この編集版は、彼女が自分の初期の人生

を綴っていた頃に、中等学校教育の副読本として出版された<sup>22</sup>。その時まで、彼女はピアノを弾くことを諦めてしまっていた。テニスは30代後半まで続けたが、乗馬を楽しむのは、まだ分割されていなかったベンガルのいくつかの県で過ごした苦勞を知らない子供時代だけだった。彼女が40歳を過ぎ中老になる頃には、誇り高き独立国家を掲げるネルー流の理想主義がモニカ同様多くの人々の心を捉えていた。植民地主義は、ラージ（植民地支配体制）の精神構造として知られていたものの永続であると同時に、インド亜大陸の分割でもあったので、非宗教的民主主義を打ち立てることに関心を持つ中産階級のインド人は、次第に確固と意識した違和感とまでいかななくても、少なくとも賛否混在の両義的な目で見られるようになった。

モニカ、そして彼女と同世代の人々、およびその後続いた世代の多くの人々は、複数のアイデンティティが融合し、子供時代の記憶が大きく異なる伝統の間の調整と交渉という、苦くも甘くもある混合であった社会的プロセスの産物であった。彼（女）らは、様々な側面において、親の血筋ばかりか他からも引き受けなければならないことに対



モニカ結婚の時（1928年）



70歳代のモニカ（1978年）

する緊張や、両義性、混乱を調整しようとした混合物であった。言語——あるいはその喪失——は、アイデンティティの形成において重要な役割を果たした。それは、ピジン・ヒンディー語、またはピジン・英語が、幼い子供たちにとっては唯一の可能な選択であった。やがて彼（女）らは成人し、自分たちがかつて選択した文化——あるいは選択するように説きつけられた文化——が、様々な意味で象徴的となるような選択をした。彼（女）たちの回想録は、植民地主義の影響を受けた人々——白人支配者であろうと帝国の名の下で支配するために雇われたインド人であろうと——

によって捉えられた、植民地主義のまさに本質とその両義性を、読者に生き生きと描き出す。回想録をこのように読むことは、制度と組織の影響が個々人の人生にどのように働いたかについての洞察を提供し、植民地主義について一枚岩的な言説に、（突き崩すとまでは行かなくとも）切り込みを入れることができるのである。

（訳 長妻由里子 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター研究機関研究員）

## 注

1. 初めて英国人との衝突があった地域。ベンガルは1905年に英国人によって東ベンガルと西ベンガルに分割された重要な州であり、それぞれが、概ね現在のバングラデシュとインドの西ベンガル州にあたる。
2. 英領インドの州（管区）はいくつかの地方に分けられ、その地方は県からなっていた。県には少なくとも一つ以上の郡があった。これらの行政単位にはそれぞれの長がおり、地方の長にはコミッショナー、県の長にはディストリクト・マジストレートあるいはコレクターが就き、郡は郡長があずかっていた。
3. 以下モニカの回想録からの引用は、本文に頁数のみを括弧に入れて示す。
4. すでに述べたように、いかなる文化間の接触も一方的なものではない。これを実証するために、私は当時の英国人女性たちの自伝の中から抜粋したものを、19世紀の大筋を私が理解する上での基礎知識として用いている。ケンブリッジ大学南アジア研究所文書官、ロイヤルコモンウェルス協会図書館、ケンブリッジ大学、またロンドンの大英図書館東洋・インド省コレクションなどに保存されている、19世紀および20世紀初期にインドで働いた男性、女性の未出版の回想録は非常に貴重な情報源である。インド文官職、医師、茶園管理者、他の職業従事者の妻と娘の自叙伝を含むその種の著述は、私が、文化の混交性・衝突・共有のまさに本質的なものを理解するための文脈を供給した。加えて、大英帝国・ロイヤルコモンウェルス博物館には、充実していく口頭の歴史記録保存所に関する短い注釈付目録があり、どれくらいの範囲で男や女が——程度に差はあっても——大英帝国の建設に関わったのかについて価値ある洞察を提供してくれた。社会科学振興会より受けた十分な生活費付旅行助成金のお陰で、1998年夏、私はこれらの図書館を広く利用することができた。
5. すぐれた文官であることに加えて、ロメシュ・チョンドロ・ドットはベンガル語・サンスクリット語・英語に精通していた。彼には著作数冊があり、その中には英国によるインドの市場と労働の搾取を分析した『インド経済史』二巻が含まれている。また彼はベンガル語で小説を数本書き、マハーバーラタとラーマーヤナを英詩に翻訳もした。彼は定年前にI.C.S.を退職し、1899年にインド国民会議の議長になった。彼の二人の従姉妹トル・ドットとアル・ドットはともに肺病で20世紀初めに亡くなるが、生前に英詩と仏詩の分野で評価を受けていた。シュレンドロナト・バナジーは、逃亡者リストに名前を誤って記載するというささいな過失を犯したために、1873年にI.C.S.を免職されてい

る。その後バナジーは、カルカッタの2、3校のカレッジで教鞭をとると同時に、カルカッタ市政にも関わるようになった。彼は雄弁家として名を馳せており、彼の講義は学生たちを魅了した。1880年代以降、彼は民族主義の政治において重要な人物となった。

6. インドにおける英国支配の多様な側面に関して、多くの説明がされている。G・F・アトキンソンは『カレーラ イス—19世紀インドにおける英国人の社会生活』の中で、植民地支配者の社会生活—異国の文化と大陸性の気候、召使い制度、また県役人の仕事に順応する過程—について40ページのカラー図解でまじめくさった調子でおもしろおかしく描写している。フィリップ・ウッドウラフの『インドを支配した男たち、建国者 第1巻』や『守護者 第11巻』はインドの歴史におけるこの側面を非常に読みやすく記述したものである。
7. 多くの文官は、キャンプ生活について詳細に叙述している。下記の引用には、G・O・トゥレベリヤンが、遠隔地の巡察で数々の発見をすることを大いに楽しんだことがはっきりと現れている。

インドでの仕事は非常に多様でいつも面白い。寒い季節の間、県長官は自分の管轄の県内あちこちを、ある場所では一晩、別の場所では三日間とテントを張って巡察し、また大きな町では一週間もかかる用事があることもある。冬の数カ月の間のテント生活は楽しいものだ。特に自分の仕事に専念している男にとっては。(Trevelyan 1864, p. 137)

学校や診療所の退屈な巡察や、橋や道路の用地にまつわる争いの疲れをいつも解消してくれるのは、午後に途上で山鶉狩りをしたりしながら次の野営地まで遠回りで移動することだった。そしてその日の喜びは、控えめなものではあったかもしれないが、疲れに慰安を与えるものであった。

いくぶん疲れていてほこりまみれで、たそがれ時の会合場所に到着すると、自分のテントが張られ、スープとカレーが二、三分でできあがり、給仕が硝石で冷やされた瓶入りレモネード持って現われる。そして村長が、あと私が到着するのが一日遅かったら大変なことになっていたと報告しようと待ち構えている。こういった諸々を目にするのは楽しいことだ。(ibid., p. 37)

8. アンソニー・キングによれば、20世紀初頭のバンガローは、土壁あるいは箆を壁に使った、草ぶきのインド式の建物を描写するために用いられた言葉「バングラ」が変化したものである。時が経つにつれ変化し、最初は、日干しレンガの壁と瓦屋根が草ぶきの屋根でできた英国式の住居に進展した。さらに後になると、屋根にはより耐久性が持たされ、おそらく三階が加えられ、ベランダが必須になった。アンソニー・キング参照。
9. 20世紀初頭、ベンガルでは、最上級の地位にある役人のための住居には、食堂一部屋、応接間一部屋、18フィート(約5.4メートル)四方の寝室四部屋、書斎一部屋、化粧室二部屋、トイレ六つ、および物置一部屋とランブルーム一部屋が設備されていた。モニカの父は県長官だったので、おそらくこれよりもやや小さめのバンガローに住んでいたのだろう。
10. 陸軍大佐ヘンリー・ユールとA・C・バーネル編纂の辞書『ホブソン・ジョブソン』によれば、この言葉“compound”はマラヤにある英国工場のカンポンに由来し、その後大英帝国の他の場所へ広がった語で、原を意味し、バンガローの場合にはその周辺の庭を意味した。通常囲い地区塀として知られているものによって囲まれていた。
11. ジョージ・グラハムは『<sup>モフオンショナル</sup>田園生活、あるいはベンガル南部における文官』(Graham 1878, p. 98)の中でチャプラーシーの「第一の義務」は、「もちろん、事務的な書簡やメッセージを運ぶことであつたが、彼らは家庭のあらゆる仕事も行い、特に結婚所帯では子供の面倒を見ることを好んで行っていた」。
12. 父親の兄の妻のこと。この場合、この女性は血縁関係にはないが、彼女の夫がギャネンドロよりも年上であったため、子供たちはこの夫婦のことをジェタモシャイ(父の兄)・ジェティマー(父の兄の妻)と呼ぶように教えられた。
13. 海を渡ることを禁じられた理由の一つとしてあげられるのは、若い男性が海を渡った際に、食べ物、交際、飲水に関わるような、自分のカーストの身分が求める様々な慣例を守ることが困難になると一般的に信じられていたということである。それについては、海外に渡った若い男性が実際にふさわしい規律を遵奉しているかどうか、あるいはカーストの階層制の外側の人々によって汚染されていないかどうかは、家族には分かりかねた。そのような状況にお

- いて、因襲的な考えを持ったギャネンドロの祖母は、彼が好ましくない影響の下にさらされることを望まなかったの  
で、彼が英国へ行くことを許可しなかったのだ。
14. 19世紀初めの数十年間、カルカッタでラム・モホン・ライによって設立されたブランモ協会は、ある合理的な原則  
に従ってヒンドゥー教の教典を解釈した。その教義にはウパニシャド、人道主義、無形神信仰を拠り所とすることが  
含まれている。改革主義宗教において大切なことは、それが女性の解放と言論の自由の支持に関わったことであ  
った。
15. パンカー引きは、1785年頃インド亜大陸に導入されたと推測されている。どの回想録もほとんどパンカーワー  
ラーと彼の仕事の器用さ、そして機械的にロープが引かれている間に彼がまどろんでいる様子が言及されている。
16. 変化する期待に対応できるように訓練されたコンパニオンとしての妻という理想は19世紀中葉までに現れた。中産  
階級のインド人による女学校設立の要求が明確化したのもこの頃である (Karlekar 1991)。家庭の外へ出て学校に通  
うことを許可される女子の数はごくわずかな割合でしかなく、大方がザナーナ、またはアンタープル教育として知ら  
れている家庭教授を利用していた。学校のカリキュラム、女性たちの日記や作法指南書は、良く訓練された内助者  
や、夫の心の友といった理想が強調されている (ibid.)。
17. シュシャマは自分には「野心があり、プレジデンス・カレッジの学生になりたいと強く望んでいる」と書いた (Sen  
p. 90)。ところが、彼女の父親はこの考えに反対だったので、彼の義理の妹シュルラを後ろ盾にしたのだ。その代わ  
りとして、シュシャマの失望を乗り越えさせるために、北インドへ送られ別の叔父と叔母と共に旅行をした。シュ  
シャマは初期のインド人女性運動に参加したり、「全インド女性会議」のメンバーになることで、いくらか野心を遂  
げることができた。1947年のインド独立後、彼女は国民会議の国会議員になった。シュシャマは、R・C・ドットの  
すべての孫の中で公の面で最も成功した人間であることは明らかだ。
18. 19世紀後期と20世紀初期のベンガル人女性による多くの自伝的叙述は、兄や父親から受けた、特に英文学や英詩の  
教授についてかなり長い頁を割いている。初期のベンガル人詩人だったカミニ・ライは『聖書』とコンウェイの『聖  
なるアンソロジー』の授業を父親である法律家のチョンディ・チョロン・シェンから受けたことを記憶していた。一  
日の終わりに、父親は彼女に家庭教師として指導をしたのだ。カミニは次のように言っている。「子供の頃、私  
たちは英国人の少女にとって当然である多くのことの手ほどきを受けた」 (Ray 1906; Karlekar 1989-90)。
19. 女家庭教師の制度は特に興味深いものである。教育を受けた若い女性が冒険と生計を求め、多くの場合自分にぴ  
つたりな結婚相手に出会うことを願い、自国を離れインドへ来たのだろう。たいていの場合、彼女たちを雇う(主に英国人  
の)家庭にはちょっとしたジレンマがあった。つまり、彼女たちがどのように扱われるべきかに関して生じる問題だ。女  
家庭教師たちはインド人の召使いたちと一緒にされるべきではないことは明らかだったし、また当然英国人のお手伝  
いたちより一段上の扱いをされるべきだった。他の資料と同様に今日の解釈では (Barr 1989; MacMillan 1988)、女  
家庭教師たちが彼女たちを雇った家族の中になんかよく溶け込んでいたことを指摘している。雇用する側がインド人  
の場合は、子供たちや母親たちが親しくしてかなり親密な関係にあるような人との間に生じた人種的、文化的亀  
裂をどう埋めるかというような、他の問題があったことは確かだ。モニカの語りの中で自分とミス・リドゥルとの関  
係が和やかなものとして描かれているのは、通例な情景というよりはむしろ例外的なもので、おそらくシュルラの人  
への接し方にいくぶん影響を受けたためであろう。つまり、R・C・ドットの娘シュルラは、若い頃から雇われ者で  
ある英国人女性に慣らされていたので、緊張がひどく混乱するような関係になる可能性のある状況でも、くつろいで  
いて楽な態度を娘に対して示すことができたのだ。
20. マーガレット・マクミランによれば、「“Anglo-Indian” という名詞はインドに住む英国人が、欧亜混血のユーラ  
シアンがそれを採用するまで、自分たちを示すのに好んでいたものであった」 (MacMillan p. 8)。ここではモニカは  
この語 “Anglo-Indian” を欧亜混血人か他の混血人の意味で用いている。
21. 実際、歴史家のバルト・チャタジーは、そのジャンル内の区分に関して洞察を深めて論じながら、彼が研究してい  
るこの時代の女性たちの書いた自伝が、公の場のことよりはむしろ家庭生活のことを扱っているばかりでなく、「テ  
キストの戦略」が異なっているという事実に向けている。つまり、ほとんどの女性の自伝は、「記憶から導き  
出された物語」をつなぎ合わせることで、その時代の社会の歴史を語っているのだ。その結果、自己は「変化する時  
代の語りの中で抑圧された」とチャタジーは主張している (Chatterjee 1996, p. 138)。しかしながら、モニカの日記  
の大部分はチャタジーの見解の確証となる一方で、部分的には——たしかに他の多くの箇所でも——ギアーツの言

う「厚い記述」よりも、不完全な形で現れている熱望や、痛みや拒否の方が凌いでいるような、多様な感情が不均一に混ざり合っているのだ (Borthwick; Karkekar 1991; Murshid)。

22. モニカ・チャンダ『ラーイガルに吹き荒れる嵐』。

## 参考文献

- Atkinson, Capt. G. F. *Curry and Rice—British Social Life in 19th Century India*. New Delhi: Times Books International, 1982 [1880].
- Barr, Pat. *The Memsahibs-The Women of Victorian India*. London: Secker and Warburg, 1976.
- . *The Dust in the Balance-British Women in India 1905 – 1945*. London Hamish Hamilton, 1989.
- Bhabha, Homi. “Signs taken for Wonder: Questions of Ambivalence and Authority under a Tree Outside Delhi, May 1817.” *Critical Inquiry*, Autumn: 144 – 165, 1985.
- Bonarjee, N.B., *Under Two Masters*. Calcutta: Oxford University Press, 1970.
- Borthwick, Meredith. *The Changing Role of Women in Bengal, 1849 – 1905*. Princeton: Princeton University Press, 1984.
- Blunt, Edward, Sir, *The I.C.S.—The Indian Civil Service*. London: Faber and Faber, 1938.
- Brown, Penny. *The Captured World—The Child and Childhood in Nineteenth Century Women As Writing in England*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf, 1993.
- Burke, Norah (Mrs. Norah Wilson). *The Raj-India 1890 – 1920, A Story in Photographs*. n.d.
- Callan, Hilary and Shirley Ardener, *The Incorporated Wife*. London: Croom Helm, 1984.
- Chatterjee, Partha. *The Nation and its Fragments—Colonial and Post-Colonial Histories*. Delhi: Oxford University Press, 1993.
- , ed. *Texts of Power-Emerging Disciplines in Colonial Bengal*. Calcutta: Saumya, 1996.
- Chatterjee, Romola. *Courtyards of my Childhood*. New Delhi: Kali for Women, 1996.
- Chaudhuri, Nupur. “Memsahibs and Motherhood in Nineteenth-Century Colonial India.” *Victorian Studies*, 31 (1988): 4.
- Diver, Maud. *The Englishwoman in India*. London: William Blackwood and Sons, 1907.
- Donaldson, Barbara. Private papers held in the Original Memoirs Archive of the Cambridge South Asian Archive, University of Cambridge, U.K, 1982.
- Dutt, R. C. *Three Years in Europe, 1868 to 1871, with an Account of a Second Visit to Europe in 1886*. Calcutta: S. K. Lahiri and Co., 1896.
- Fraser, Andrew H. L. Sir. *Among Indian Rajahs and Ryots*. London: Seeley and Co., 1911.
- Graham, George. *Life in the Mofussil or the Civilian in Lower Bengal*. London: Kegan Paul, 1878.
- Karkekar, Malavika. “Constructions of Femininity in Nine-teenth. Century Bengal: Readings from Janaika Grihabadhur Diary.” In *Samya Shakti*, vols. IV & V (1989–90): 11 – 29.
- . *Voices from Within—Early Personal Narratives of Bengali Women*, New Delhi: Oxford University Press, 1991.
- Kincaid, Dennis. *British Social Life in India 1608 – 1937*. London: Routledge and Kegan, 1973 [1938].
- King, Anthony. *The Bungalow—The Production of a Global Culture*, London: Routledge and Kegan Paul, 1984.
- Lady Pawsey. TS of interview on September 15, 1973 by the Centre for South Asian Studies, University of Cambridge.
- Lind, Mary Ann. *The Compassionate Memsahib—Welfare Activities of British Women in India 1900 – 1947*. New York: Greenwood Press, 1988.
- MacMillan, Margaret. *Women of the Raj*. London: Thames and Hudson, 1988.
- Mazumdar, Shudha. *A Pattern of Life—The Memoirs of an Indian Woman*. New Delhi: Manohar, 1977.
- Maxwell, Lady. Memoir. TS held at Centre for South Asian Studies, University of Cambridge, 1971 – 77.
- Mrs. Lamb. TS of interview in *Voices and Echoes—A Catalogue of the Oral History Holdings*. British Empire and

- Commonwealth Museum, Bristol.
- Mrs. Mullen. TS of interview on September 15, 1973 by the Center for South Asian Studies, University of Cambridge.
- Mrs. Pengree. TS of interview on September 15, 1973 by the Centre for South Asian Studies, University of Cambridge.
- Murshid, G. *Reluctant Debutante: Responses of Bengali Women to Modernisation 1849-1905*. Rajshahi: Rajshahi University Press, 1982.
- Nandy, A. "Sati: A Nineteenth Century Tale of Women, Violence and Protest." In *At the Edge of Psychology*, New Delhi: Oxford University Press, 1980.
- O'Malley, L.S.S. *The Indian Civil Service 1601-1930*. London: Frank Cass and Co., 1965 [1931].
- Portal, Iris. n.d. Song at Seventy. Private papers held in the Original Memoirs Archive of the Cambridge South Asian Archive, University of Cambridge, U.K.
- Ray, Kamini. Shradhiki. Calcutta, 1906.
- Ray, Rajat Kanta. "Introduction." to his edited *Mind Body and Society—Life and Mentality in Colonial Bengal*. Calcutta: Oxford University Press, 1995.
- Ray Chaudhuri, Tapan. *Europe Reconsidered—Perceptions of the West in Nineteenth Century Bengal*. Delhi: Oxford University Press, 1988.
- . "The Pursuit of Reason in Nineteenth Century Bengal." in Rajat Ray (1995).
- Roy, Paroma. *Indian Traffic—Identities in Question in Colonial and Postcolonial India*. New Delhi: Vistaar Publications, 1998.
- Scott, Lady Beatrix. "Indian Panorama." Private papers held in the Original Memoirs Archive of the Cambridge South Asian Archive, University of Cambridge, U.K., 1951.
- Sen, Sushama. *Memoirs of an Octogenarian*. Calcutta: Elm Press, 1971.
- Showers-Stirling, Christian. Notes on her life held in the Original Memoirs Archive of the Cambridge South Asian Archive, University of Cambridge, U.K., 1961.
- Steel, Flora Annie. *The Garden of Fidelity being the Autobiography of Flora Annie Steel 1847-1929*. London: Macmillan and Co., 1930.
- Trevelyan, G. O. *The Competition-Wallah*. London and Cambridge: Macmillan and Co., 1864.
- Walsh, Judith. *Growing up in British India—Indian Autobiographies on Childhood and Education under the Raj*. New York: Holmes and Meir, 1983.
- Wilson, Lady (A.C. Macleod). *Letters from India*. Edinburgh and London: William Blackwood and Sons, 1911.
- Woodruff, Philip, *The Men who Ruled India, The Founders*, vol.1; *The Guardians* vol.11. London: Jonathan Cape, 1965 [1953].
- Yule, Henry and A.C. Burnell. *Hobson-Jobson*. New Delhi: Rupa and Co., [1886], 1994.

\* 本論文の訳出にあたっては、東京大学東洋文化研究所附属東洋学情報センター中里成章教授、同大学大学院総合文化研究科井坂理穂先生に、インドの歴史・ベンガル語に関して、数回にわたり丁寧なご指導や校正をお願いした。ご多忙の中、ご親切にご教授いただいた両先生に、この場をかりて深く感謝申し上げます。